

熊本におけるビジネス人材の育成

—インストラクショナルデザイン普及活動の実施報告—

鈴木克明¹・都竹茂樹^{1,2}・平岡斉士¹・天野慧^{1,2}

¹熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻

²熊本大学政策創造研究教育センター

社会人の人材育成を目的として、本事業では熊本経済同友会と連携し、企業の人材育成担当部門責任者及び担当者を対象に研修会を開催し、教育・研修の専門的知見を体系化したインストラクショナルデザインスキルの養成に取り組んでいる。平成27年度は、2015年12月に、熊本経済同友会の主催する講演会で、経営者層に対して効果的・効率的・魅力的な人材育成の啓発活動を行った。また、2015年8月（参加者26名、参加企業15社）、2016年2月（参加者31名、参加企業17社）に2度研修会を実施した。研修会に対するアンケートの結果、研修に対する満足度は高く、参加者の業務に結びついた研修を実施することができた。今後は、これまで研修会に参加した受講者を対象に追跡調査を行い、職場での実践につながる研修システムの構築に取り組んでいきたいと考えている。

1. はじめに

近年、大学には産業界が求める即戦力となる人材を育て、社会人の学び直しを推進していくことが求められている。急速な経済社会の変化を背景に、多様な背景を持つ人材が社会へ出た後に、いかに新たな知識やスキルを学べる機会を提供することができるか、ということが大きな課題となっている。

このような状況のもと、平成26年度は熊本経済同友会と連携し、企業内の教育を担う人材育成担当者及び責任者を対象として研修会を実施し、教育・研修の専門的知見を体系化したインストラクショナルデザインスキル（以下、ID）の養成に取り組んだ（2015年2月17日及び2月23日、参加者38名、参加企業・団体24社）。この研修会は、企業の人材育成担当者が、IDの基礎的なスキルを習得し、自社で実施している研修の改善・見直しにつなげていくヒントを得ることを目的としている。研修会の効果を検証した結果、IDに基づいた研修会のプログラム自体が、人材育成担当者にとって手本となり、参加者の研修改善に役立ったというプログラムの効果を確認できた。この調査結果については、本年度、国内学会で発表を行った¹⁾。

これまでの研修会に対する参加者からの満足度は高く、熊本でIDの実践を広げるための啓発活動の実施とより頻繁な研修の開催とを求める声が寄せられた。そこで本事業を通じ、幅広く研修会を実施し、熊本におけるビジネス人材を育成することで、地域の課題解決に貢献したいと考えた。

平成27年度は、熊本経済同友会と連携し、経営者向けの講演会と、企業の人材育成担当部門責任者及び担当者を対象に、2度の「研修設計入門」セミナーを実施した。講演会とセミナーの概要、および今後の展開について報告する。

2. 活動概要

平成27年度に実施した経営者向け講演会の概要と研修会の概要を紹介する。

(1) 講演会

2015年12月に、IDの普及と啓発を目的として熊本経済同友会の主催する講演会で、経営者層に対して効果的・効率的・魅力的な人材育成の啓発活動を行った。

■ 講演テーマ

熊本を人材育成事例の発信基地にしよう：

熊本大学大学院教授システム学専攻からのご提案

■ 開催日時

2015年12月24日（木）12:30～13:30

■ 講師

鈴木克明（教授システム学専攻 教授）

■ 対象者

企業経営者、役員

■ 講演概要

「自ら学ぶ社員を育てなければ、教えないこと」こんな当たり前のことが、なぜ、日本では当たり前ではないのでしょうか？ 日本の企業教育は、世界から大きく後れを取っています。言うならばガラパゴス状態です。ガラパゴスから抜け出す鍵が世界の人材開発担当者なら誰もが知っているインストラクショナルデザインです。本講演では、これまでの日本の人材育成の課題を解決するための道具としてのインストラクショナルデザインについて紹介します。

■ 参加者

70名（参加企業・団体66社）



写真1 講演会の様子

(2)研修会

以下の内容のセミナーを熊本経済同友会と共催して、熊本県内の企業を対象に2015年11月と2016年2月に2度実施した。

■ 講座名

「研修設計入門 ～自ら学ぶ人材を育成するために～」

■ 開催日時

1回目：2015年8月18日（火）14:00～17:00

2回目：2016年2月4日（木）、2016年2月18日（木）の2日間

いずれも13:00～17:00

■ 講師

鈴木克明（教授システム学専攻 教授）※2回目の2日間のみ登壇

平岡斉士（教授システム学専攻 准教授）

■ ファシリテーター

都竹茂樹（政策創造研究教育センター 教授）

天野慧（政策創造研究教育センター 特任助教）

■ 対象者

企業の人材育成担当部門責任者及び担当者

■ 講座概要

業務直結型で組織に貢献できる研修を設計するための基礎的な知識とスキルを修得することを目的とします。教育・研修を効果的・効率的・魅力的にするための方法論であるインストラクショナルデザイン（以下、ID）の手法を用いて、研修で何を教えるか、どう教えるかだけでなく、なぜそれを教えるか・学ぶ必要があるかを明確にします。そのことにより、研修を「ただのお勉強」で終わらせることなく、研修の参加者がその成果を実務に役立て組織に貢献する研修の設計ができるようになることを目指します。

■ 参加者

1回目：26名（参加企業・団体15社）

2回目：1日目28名（参加企業・団体14社）

2日目27名（参加企業・団体14社）



写真2 8月開催の研修会の様子

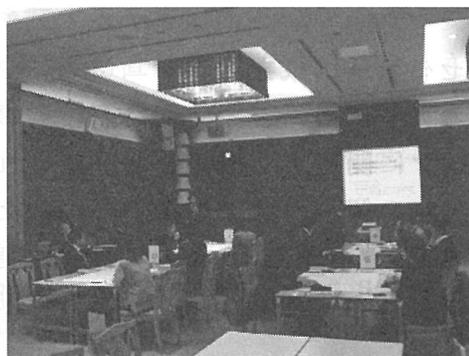


写真3 2月開催の研修会の様子

3. 研修会の評価

セミナー終了後のアンケートの結果から、セミナーの満足度と成果の観点から実施した参加者評価について報告する。

(1) 満足度

セミナーについて、「このような研修を今後も続けてほしい」「同僚や後輩に勧めたい」「職場に戻ったら本研修の成果を活用するつもりだ」という3つの意見について、どれを支持するか4件法で評価した結果を図1、図2に示す。いずれの意見についても、90%以上の参加者が「とてもそう思う」「そう思う」と回答した。

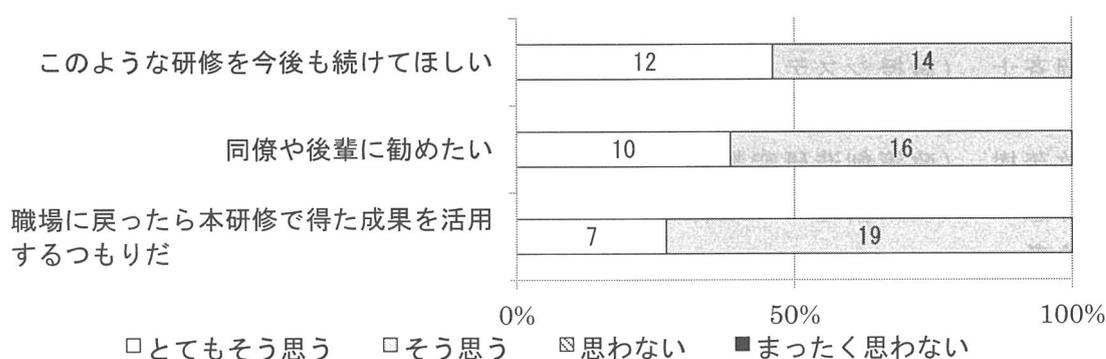


図1：8月開催のセミナーに対する満足度（N=26）

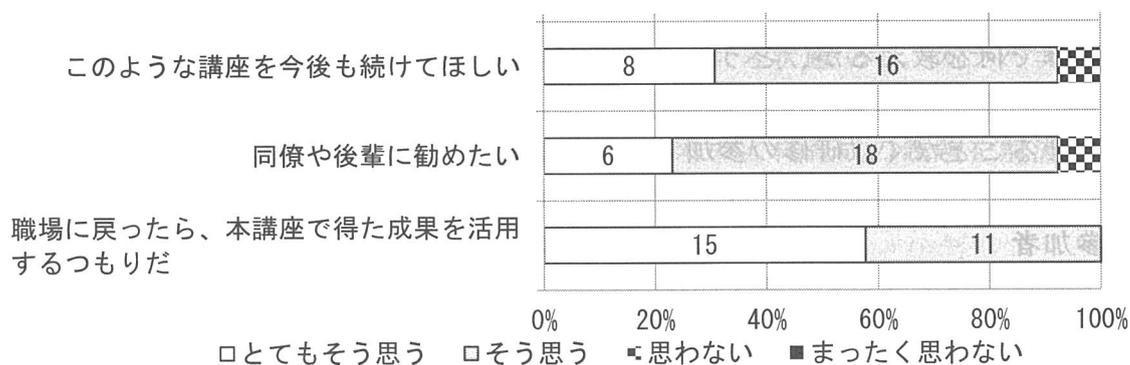


図2：2月開催のセミナーに対する満足度（N=26）

(2) セミナーの成果

セミナーについて、「現在の職場の課題を解決する手がかりがつかめた」「今後、本テーマに関連する情報をどう調べれば良いかが分かった」「今後、業務で問題に直面した時の解決の手がかりがつかめた」「これから職場で使えるような有用な行動計画が作成できた」という4つの成果の達成度を4件法で評価した結果を図3、図4に示す。いずれの意見についても、80%以上の参加者が「とてもそう思う」「そう思う」と回答した。

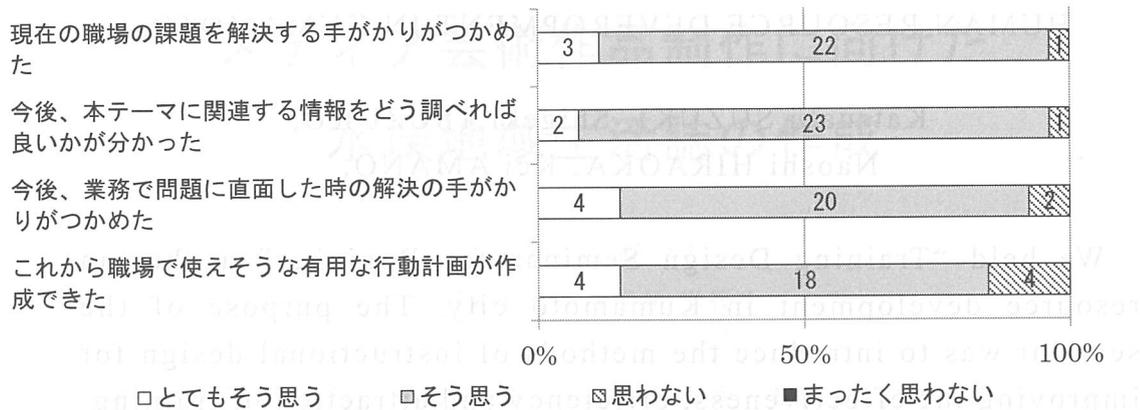


図 3 : 8月開催のセミナーの成果 (N=26)

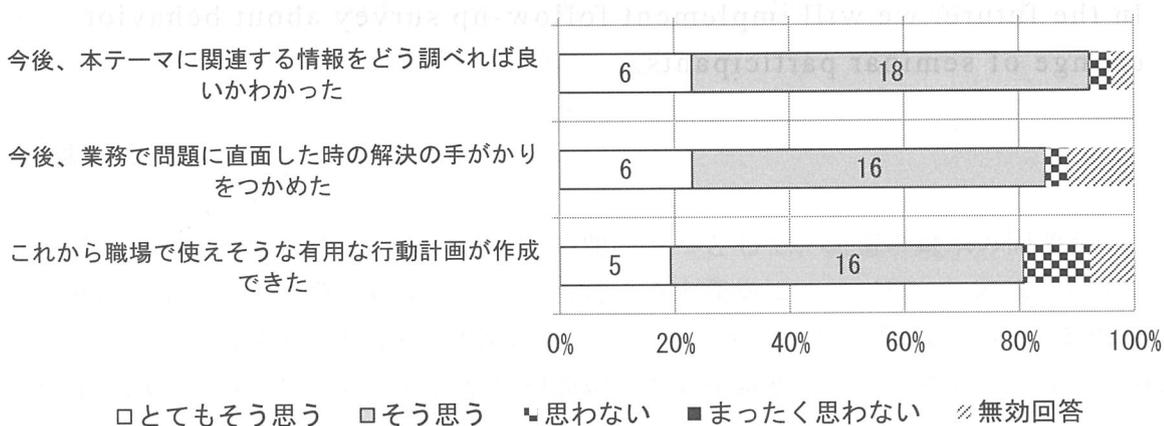


図 4 : 2月開催のセミナーの成果 (N=26)

4. 今後の展開に向けて

本稿では、平成27年度に熊本におけるビジネス人材の育成プロジェクトとして実施した経営者向けの講演会及び人材育成担当者向け研修会の概要を報告した。研修会で実施したアンケートでは、満足度および成果の達成度について概ね高い評価を得ることができた。

2年間のプロジェクトで、研修会への参加者数は、94名（43参加企業・団体）に達した。今後はこれまでの研修会参加者を対象に、研修で学んだことが実際の業務で活かしているか、追跡調査を行い、研修の効果を検証する予定である。参加者の要望や業務への取組状況を踏まえ、より教育効果が高く、業務直結型の研修システムを構築し、地域に還元していくことで、熊本県内の人材育成に貢献していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 天野 慧・都竹 茂樹・鈴木 克明・平岡 斉士 (2015.9) 企業の人材育成担当者はどのようにインストラクショナルデザインを研修改善に役立てたのか. 日本教育工学会第31回全国大会 (電気通信大学) 発表論文集, 911-912

(2016. 5. 31 受付)

HUMAN RESOURCE DEVELOPMENT IN KUMAMOTO

Katsuaki SUZUKI, Shigeki TSUZUKU,
Naoshi HIRAOKA, Kei AMANO,

We held “Training Design Seminar for Beginner” as human resource development in Kumamoto city. The purpose of the seminar was to introduce the methods of instructional design for improving the effectiveness, efficiency and attraction of training. According to the questionnaire, almost all of them satisfied with the seminar and most of them felt the usefulness of the methods. In the future, we will implement follow-up survey about behavior change of seminar participants.